

テイルズ オブ ザ ワールド レディアント……グランブルーファン
タジー……？

時長凜祢@二次創作主力垢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

星晶（ホスチア）と呼ばれるエネルギー資源の奪い合い。

二つの世界の生存競争。

それらが同時に起き、ようやく収束へと向かおうとする中、その収束に貢献した世界樹の守り手・ディセンダーである一人の女性、アグリモニーは、一度世界樹へと戻り、そして、再び自分が降り立つたギルド、アドリビトムへと帰還した。

そこで彼女は何度も退けたことがある宿敵に絡まれたり、女好きの青年にくつつかれたりしながら、日常生活を送っていた。

だが、ある日彼女はアドリビトムの拠点であるバンエルティア号ごと、知らない世界に飛ばされたことに気がついた。

自身を生み出した世界樹の恩恵、温かさを感じない、ルミナシアではない世界。

一人ではなく、アドリビトムのみんなや、たまたま足を運んでいた因縁の騎士、そして、かつて互いの世界の生存競争を行つたジガルデの住人だつたラザ里斯と共に、見知らぬその世界で旅をする。

その世界で過ごしている、多くの住人と星の獣たちの事件に巻き込まれながら。

目

次

プロローグ

ルミナシアの救世主の日常

空の世界で日常を

突然の異世界

転移の先で合流したのは……

サレとラザリスの邂逅

17 13 8

1

プロローグ

ルミナシアの救世主の日常

星晶^{ホスチア}を巡った争い。二つの世界の生存競争。それらの事件が発生した世界、ルミナシア。

それらの争いを抑えるため。世界の危機を救うため。世界樹から遣わされた世界樹の守り手、ディセンダーは、御伽噺と称された予言の通り、小さなお手伝いをこなしながら、あらゆる問題を解決していった。

ディセンダーたるその者の名はライラ。董色の髪と、コバルトブルーの瞳を持つかなりおとなしい女性。

時には僧侶となり人々を癒し、時には剣士として前衛に立ち、時には回復と攻撃を両立できるビシヨップや魔法剣士となつて依頼に身を投じ、時にはガンマンとなり後方と前方を両立する者となる。

そんな彼女が生活しているのは、アドリビトムと呼ばれる空飛ぶ船のギルドの中。

最初に出会したカノンノや、カノンノの親代わりたるロックス。アドリビトムのリーダーたるアンジュなど、多くの仲間と共に過ごし、時には女好きなメンバーから口説かれたり、時には仲間と手合わせをしたりしながら、なんの変哲もない日常生活を送っている。

ちなみに、彼女にはやたら粘着質な因縁をつけて来る者もいたりする。ギルドのメンバーには存在していないが、ギルドの外には二人ほど。

片方はウリズン帝国の騎士。片方は途方もないバトル狂。しかし、彼女は様々な職業へと姿を変えることができるその立場を利用して、二人をコテンパンに倒していくたり……。

「やあ、ライラ。こんにちは。」

「うつわ、また出やがった。」

「……騎士様はかなり忙しいお仕事だと記憶しています。なのに何度も来て大丈夫なのですか……？」サレ。」

「こいつしょっちゅうライラちゃんどこ来てね？一応ここ、こいつにとつての敵地つしょ？」

「そのはずなのですが……。」

この日もまた、彼女の元に姿を現す因縁持ちが一人いた。ウリズン帝国に所属している騎士の一人であるサレだ。

彼は、これまで何度も彼女の仲間であるヴェイグに因縁をつけて、勝負を吹つかけてはやられている。

つい最近も、シノフ湧泉洞にて争い、何度もわからぬ勝負に蹴りをつけた。

しかし、彼女は目の前で人が死にゆくのを見ることを嫌っていたため、どうこう言われようと関係ないとばかりに、手元にあつたライフボトルを数本一気に飲ませた上、当時ビショップだつたこともあり、レイズデッドも使用して、強制的に生き長らえさせたのである。

結果、これまでヴェイグに対して向いていた執着は、彼女の方へと向けられてしまい、今もなおしつこく絡んできているのだ。

いつも通りのお客様に、ライラは困惑し、彼女と一緒に行動を取っていたアドリビトムメンバーの一人、ゼロス・ワイルダーはその姿にドン引きしてしまう。

「うつわ!! また来てるヨ!!」

「相変わらず執着されているようだな、ライラ……。」

そんな中、二人のギルドメンバーが姿を現す。ユージーン・ガラルドとマオだ。

ヴェイグと同じ村からやつてきたため、サレが行つてきたことや、ヴェイグとの確執も良く知っている。

そのため二人は警戒と嫌悪を抱きながら、目の前にいる因縁の相手を見つめた。

「……まあ、私が絶望した姿見たいのなら、それが見れるまで生きたらどうですか……と言つてしましましたから。正直に言いますと、絶望とか憎しみとか？そのような感情、未だによくわからないのですが……。」

「……ある意味で便利だよねえ？本当に何も知らないのだから。こつ

ちに来てだいぶ君だつて時間が経っているはずだろ？なのにまだ理解できないって？お気楽と言うか何と言うか、本当にうざつたらしくらいに純粹無垢だよね。」

「ええと……ごめんなさい…………？」

「いやいやライラちゃん……そこ謝んなくていいから。」

「ところで、キミ、しようつちゅうそこの赤い髪の彼といるみたいだけど？」

「赤い髪の彼…………？ゼロスのことですか？でしたら、彼とはよく一緒にパーティを組んで依頼を受けているので、共にいる時が多くなりがちですね。回復と攻撃を両立できますから、私が間に合わない時とかに回復の援助をしてもらつて、彼が攻撃に集中している時は、私が支援する形でバランスが取れますから。」

その影響か、日常生活でもよく一緒にいることがあるんです。ビジネスパートナー……と言ふものに近いのでしょうか…………。」

「……俺の目には口説かれてるようにしか見えなかつたが？」

「ボクもユージーンと同じ意見だネ。でも、ライラつてば気づいてないんだヨ…………。」

「…………純粹どころか鈍感つてことかな？」

「？」

「ライラちゃんは、俺をまと行動取るのを好んでるんだよ。つまり、俺さまとライラちゃんは仲良しつてわけ。余計なこと教えないでくん

ね？」

「??」

しかし、大概は彼女の無意識によるスルーにより、その絡みがどんなものか理解されることではなく、毎度脱力してしまいます。

ある意味で、ピリ。ピリとした嫌悪な空氣を無意識のうちに霧散させてしまうため、激しい争いには発展しないことがほとんどだ。

「そう言えど、ここの人教えてもらつて、ブルーベリーを含むいろんなフルーツのジャムを作つてみたのですが、よかつたら食べてみませんか…………？」

まあ、サレには、お気に入りのジャムがあると聞いてますから、お

口に合うかまではわかりませんが……。」

「へえ？ 君がジャムを？」

「ええ。初めて食べた時に作ることもできると聞いて、私も作つてみたいってなったんです。そしたら料理が得意な人が教えてくれました。

それで、ブルーベリーのジャムを作つてみた時、ここで過ごしてゐ子が、風の噂でサレもいつもブルーベリージャムを持ち歩いていると聞いたもので……。」

「……なんでそんな情報が漏洩しているのかな？」

「多分、ライラが言つてるのつて、食いしん坊なメンバーのことだからね。」

「あれは食に関してかなり敏感なところがあるからな。どこで聞いてきたのかはわからんが。」

「あく……もしかしなくとも、それつてイリアちゃんのペツトの？」

「はい。コーダから聞いた、お話です。」

「誰がそんな話をキミにしたかなんてどうでもいいんだけど？ いつたい誰が僕のプライベートを……。」

ブツブツと文句を言い出すサレの姿にライラは首を傾げる。

彼が何にイラついているのか、少しばかり理解ができないようだ。

そんな彼女の姿を見て、サレは一度溜息を吐く。しかし、すぐに彼女が作つてみたジャムの話を脳裏に浮かべては、もし、作ったそれに対する酷評したら、感情が乏しい彼女はどんな反応をするのだろうかと言う感情を芽生えさせる。

口に合わないかも……と言つていたことから、大したダメージにはならないかもしれないが、多少は落ち込むのではないか……？ 普段は笑顔を見せて、穏やかな雰囲気を持つ彼女を悲しませることができるのはないか？

そこまで考えて、サレは口元に笑みを浮かべる。ゼロスやマオ、ユージーンからあまりいいような表情をされていないとしても、自分には関係ないと言わんばかりに。

「そうだねえ……。世界を救うために遣わされたディセンダーがどれ

ほどのものを作るのか興味が湧いたよ。試食してあげようか?」

「本当ですか?ありがとうございます、サレ。普段から食べ慣れてる人からしたらどんな味に感じるのか、ちょうど知りたかつたところなんですね。」

……『まあ、それを今から酷評するつもりなんだけどね?』と考えながら、無垢な笑顔を見せるライラの落ち込む姿や悲しむ姿を脳裏に浮かべる。

きつともてはやされて過ごしてきたこの子のことだから、いい表情を見せてくれるだろうと。

そんな悪巧みに気づかないまま、ライラは、こここのリーダーにちよつと事情を話して来ると言つて立ち去つていく。
「絶対悪いこと考えてるヨ……」

「間違いないな。」

「まあ、ライラちゃんが仮にいじめられそうになつても俺さまが助けるんけどな。そこでライラちゃんの好感度を一氣にもらつて、そのままハートも虜掴み……でひやひやひやひや!俺さま、もつとモテモテになつちまうなあ……!!」

「……何なんだい彼?」

「……説明できんな。」

「女好きとしか言えないよね。」

「それは見ていたらわかるよ。ていうか、ライラは人間じゃないのに彼にとつては範囲内なのかい?」

「みたいだヨ。ボク、詳しくは知らないけど。」

「知らなくていい。」

「本当、ここつて個性的な人間ばかり集まるねえ。」

「「お前が言うな。」」

その姿を見送りながら、残された四人は言葉を交わす。互いに相容れない存在であつても、彼女の前では関係がないのだ。

『コイツらと話すつもりはなかつたんだけどな……。』と少しだけ考えながら、サレは甲板とホールを繋ぐ扉の方へと目を向ける。

そこには複数のアドリビトムのメンバーがおり、その中には因縁の

相手であるヴエイグの姿もあつた。

僕は珍獸じやないんだけど、と少しの苛立ちは彼は抱くが、今はそれを発散する前に、ルミナシアの救世主が作つたと言うジャムをどのように酷評してやろうかと言うことのみを考える。

率直に不味いと言つてやるか、食べれたもんじやないと放り投げてやるか、あるいはどちらも行つた上、行儀は悪いが吐き出すような素振りを見せてやるか……どの行動を取つても、間違いなくあの「ディセンドラー」はショックを受けるだろう。

その時の表情さえ見ることができれば、ここに長居する必要はない。帰つて早々に彼女に対する新たな嫌がらせを考えてやろう。

そんなことを思いながら、サレは小さくほくそ笑む。もちろん、彼の様子を見ていたギルドメンバーは、すかさず彼に対する警戒と嫌悪を向けて来るが、今の彼にはどうでもよかつた。

あの生意気な赤子同然の娘を悲しませること……それが、今の彼の目的なのだから。

「持つてきました。本来ならパンやクラッカーにつけるつて聞きましたが、サレは確か、そのまま食べることがあるんですよね？」

「何でそんなことまで知つてるのかなライラ？」

「食いしん坊のコーダくんが、噂で聞いたつて言つてました。その反応つてことは、噂は事実なんですね。」

「本気で誰だよそんな情報漏洩してる奴。戻つたら即行で探し出して絞めあげないとなあ……。」

「やだ物騒……」

「そんな言葉どこで覚えたんだい？」

「ゼロスくんから教えてもらいました。」

「ゼロス……そんなことライラに教えたの？」

「ライラちゃんは本当に何も知らないから、優しい俺さまが色々教えてあげてんのよ。最近は、いろんな遊びも教えてあげてるんだぜ？」

「……ライラ!! ゼロスに影響されちゃつたらダメだヨ!!」

「え?」

「おい!! どう言う意味だよそれえ!!」

「無垢なのも困り物だな……。」

そんなことなど露知らず、ライラたちは、いつも通りの調子で言葉を交わす。

賑やかだなここ……と少しだけサレは困惑しながら、目の前で繰り広げられる会話を聞き流し、早く彼女を苦しめたいと内心ソワソワしながらも、会話が終わるタイミングを待つのだつた。

この時の彼らはまだ知らない。今日、この日自分たちがまとめて別の世界に飛ばされて、この世界ではない別の空にて、相容れない者同士であるにも関わらず、共に過ごすことになることを。

そして、その空で起こる数多の試練、数多の事件に巻き込まれてしまふことを。

空の世界で日常を

突然の異世界

サレの訪問にも慣れ、ロックスたちに教えてもらいながら作ったジャムの及第点をサレ本人からもらい、満足しながら過ごしていると、アドリビトムの拠点であるバンエルティア号が空を駆ける。

どうやら、移動が始まつたらしい。ついでにサレを、ウリズン帝国の近くまで送るとアンジュは言っていた。

そう言えば、初めまして……ですね。私の名前はライラ。この世界

……私が守るべき世界樹と、その世界樹から生まれた子のような世界、ルミナシアを守ると言う使命を与えられていたディセンダー。

使命を与えられていた……と言つた理由は、今はただ、この世界の行く末を見守るために、再びこの地に降り立つたからで、本当は二度と戻れないはずだった者です。

ですが、世界樹……人間で言うところの私のお母様……？は、私が、アドリビトムを気にかけていることを知っていたみたいで、アドリビトムの行く末も見守つてあげなさいつて、また、同じ姿で世界に送り出してくれました。

まあ、ちょっと送り出し方が過激でしたが、アドリビトムにいた時の日常生活をまた送ることができたのはとても嬉しいです。

そうそう、私のお母様は、もつとこの世界のことを知りなさいつて言つてくれたんですよ。

私は、まだこの世界に生まれ落ちて数ヶ月か半年くらいしか経っていないから、知らないことがいっぱいあるので。

人間の感情だつたり、人間が生きるために必要な知識だつたり、この世界のこと全てだつたり……たくさん、学ばないといけないことがあります。

だから、お母様は学んできなさいつて言つてくれました。悪いことは学んだらダメよとも言われましたが。
にしても、悪いことつてなんなのでしょう？サレとかがやつてたこ

とでしようか？ヴエイグたちは、サレは悪い人だから、絶対に心を許したらダメってよく口にしてますが……。

まあ、確かに村の人を苦しめたり、痛めつけたりしたらダメなのは知つてます。

そうされることで、人間がどんな気持ちになるのか教えてもらつたことがありますから。

“暁の従者”って言う、ディセンダーを待ち望んでいた人たちからも、一度話を聞いたこともありますから、大まかなことはわかつります。

だけど、悪いことつて言わることは、他にもいっぱいあるつてことですよね？

となると、教えられた場合、ちゃんとNOを言わないといけません！私は、NOと言えるディセンダーになるのです！えへん！

「キミつていつも移動中はここにいるのかい？」

「はい。空を移動している間は、甲板に出るわけにもいかないので、甲板以外で外が綺麗に見えるここにいつもいます。

ここのお掃除をする代わりに、自由に使つていいとも言われているので、ある種のもう一つの私のお部屋なんですよ。」「ふうん……。」

そんなことを考えていると、バンエルティア号をうろついていたサレが私の元へとやってきました。

普段は敵対している……と言うか、何かしらのちよつかいをかけて来る彼が、バンエルティア号をうろつく姿は、少々変な気もしなくもないですがね。

「この船のコンシェルジュとか言つてる奴から、展望室へ行くならこれを持つて行けって言われたよ。どうやらキミ用の飲み物みたいだね。ついでに僕も渡されたんだけど、アレ、僕が敵だつてこと忘れてないかい？」

「アレジやなくてロックスです。まあ、彼のことだから、今のところサレが周りに危害を加えていないから渡したのでしょうかね。

あとは、この空の上を移動する船の中には、多くの実力者が集まつ

ていますから、いくら実力が高いサレでも手を出すようなことはしないだろうと判断したのではないかと思います。

この空を飛ぶ大きなお船の中では、明らかに不利なのはサレの方だと思いますから。」

「……まあ、確かにここでは僕は完全にアウェイだからね。キミらを全員相手にするような真似はしないよ。間違いなく、僕の方がやられてしまうだろうし。でも、キミ一人だけを相手にするだけなら、いくらでも行動は移せるけど?」

「それをしたところで、皆さんが駆けつけてお終いなのでは……?」「何も手を出す、相手にする、と言うのは戦闘だけじゃない。いくらでもやりようはあるのだから。」

「……よくわかりませんが、あまりよろしくないことなのはわかりました。」

まあ、何かしようものならピコハンで思い切り殴るだけですので、ある程度は問題ないと思いますが……。」

「……なんでよりによつてピコハンをチョイスするのかな。あれ、当たり方によつたら本当に痛いからね?」

「ピヨピヨしますからね。」

「気絶ね氣絶。なんだいピヨピヨつて。」

「え? ピヨピヨ~つてヒヨコさんがクルクル回つてるような雰囲気がありますよ?」

「キミの目には何が映つてるのかな?」

? 皆さんには見えないのでしようか? 私にはヒヨコさんがクルクル回つてるように見えるのですが……。

そんなことを思いながら、サレが持つてきたマグカップを受け取る。中にはココアが入つており、甘い香りを広げていました。

ココア入りのマグカップ、よく二つも持つて来れましたね、サレ。熱くなかったのでしょうか……。

まあ、せつかく頂きましたから、ほかほかなココアを…………ん

「…………お母様…………?」

「?・どうかしたのかな?」

「サレは何も感じないのですか? 明らかに空気が変わつてているのに。」
「は?」

マグカップに口をつけようとした瞬間、不意に感じた違和感。空気の変化、入れ替わりの気配。

明らかにおかしな気配があると言うのに、彼は気づいていません。よくわからないと言わんばかりに首を傾げて困惑していました、ら「世界樹の……お母様の声が聞こえないんです……。」

「世界樹の声?」

「何かあつたに違いありませんらきつと。急がないと……!」

ではらこれは、ディセンダーである私だけが感じているものでしょ? それとも、マナに敏感な子たちや、世界樹の神子であるコレットちゃんとゼロスくんも感じているものなのでしょうか?

……わかりません……全くと言つていいくほどにわかりませんが、私たちに何かが起こっていることだけは嫌でも理解できました。

妙な胸騒ぎを感じる中、私は急いで展望室から下へと降り、ホールの方へと走り抜ける。

階段を使わず飛び降りたせいで、カノンノには驚かれたし、チャットちゃんからは怒るような声が飛んできましたが、今はそれどころじゃないのです。

「うわあ!! ちよ、ライラ!! 船内を走つたらダメって言つてるじゃない!!」

「ごめんなさいアンジュちゃん!! でも、今はそれどころじゃないんです!!

「ええ!! それどころじゃないって……つて、今空を飛んでるのだから甲板に出るのは危ないわよ!!」

「それでも出なきやいけないんです!! 明らかに空気が変わつてるんですよ!!」

「ええ…………? 空気が変わつてるつて……ちょっと!!」

アンジュちゃんから怒鳴るような声が聞こえてきたけど、私はその声を無視して、甲板の方へと飛び出す。

その瞬間私の目に映つたのは一面の蒼い空。バンエルティア号が飛ぶ空の下から、海も、地面も、世界樹すらも消えてしまっていた。

「……ウソでしょ……？」

空気中に漂うのはマナとは似て非なる物質で、辺りからマナすらも消えている。

私の力に衰えはないけど、それでも、あまり居心地がいいとは言いくらいものでした。

「ライラちゃん!!」

「ライラ!!」

混乱して佇む私の元に、ゼロスくんとコレットちゃんがやつて来る。

二人の顔にも焦りが見えており、世界樹の神子とされているこの二人も、私と同じ違和感を感じていたのだと理解できました。

「ライラ。何があつた?」

二人に続いてやつてきたのは、アンジュちゃんが雇つていた傭兵の一人、クラトスさんでした。

彼は、ゼロスくんとコレットちゃんの焦りを見てやつてきたのでしょうか?なんにせよ、状況を説明しないと……。

「お母様が……世界樹の気配が消えたんです……。私たちが今いるのは、ルミナシアとは違う、全く知らない世界です……!」

混乱を押し込め、なんとか口にした言葉に、ゼロスくんたちが目を見開く。

クラトスさんも、これには驚いたのか、珍しく表情が変わっていた。

転移の先で合流したのは……

バンエルティア号の甲板から見えるのは一面の空。上下左右全て空。

遠くの方に、島のようなものが見えなくもないけど、それでも結局空ばかり。

普段は見えるはずのお母さん……世界樹の姿はどこにもなく、嫌でも別の世界であると理解してしまう。

「お母様の声が聞こえません？ 世界樹そのものも見えません。マナも感じ取れませんから、どう考へても、この世界はルミナシアじやありません。」

「なんかおかしいとは思つたけど……やつぱりか。」

「うん。マナに近い力はあるみたいだけど、やつぱりマナじやないもん。」

「……異世界か。なんの前兆もなかつたはずだが。」

集まつてきだゼロスたちと確認するように言葉を交わす。世界樹にゆかりある人たちは、やつぱり気づいていたみたいですね。

じゃあ、セルシウスも……？

「セルシウス……何か、感じ取れますか？」

「ディセンダー……。ごめんなさい。私も、あなたたちと同じで、全く知らない世界に来てしまつたことくらいしかわからないの。世界樹の化身であるあなたがいるから、私も一緒にいれるみたいなのだけど。」

「そうですか……。」

「セルシウス。お前も前兆は何も感じなかつたか？」

「ええ。ずっと甲板にいたけれど、全然気づかなかつたわ。急に空気が変わつて、甲板の外を見てみたら、こんなことになつていたから。何が原因で起こつたのかもわからないわね。」

「ふむ……これに関しては、全員に通達するべきだろう。たまたま乗つていたサレにもな。」

「そうですね……。」

クラトスさんの言葉に素直に頷く。まさか、サレを巻き込んでしまうとは思いませんでした。

伝えたるどんな言葉が返つてくるのでしょうか……。嫌味か、苛立ちが、別の何かか。

なんにせよ、あまりいい反応が返つて来ないのは確実でしょう。少しだけ溜息を吐いてしまう。ここで過ごすようになつてから、たまに漏らすことがある大きな吐息。

この溜息と言うものは、複数の感情により発生することがあるようです。何を思つて出たのか少しだけわかりません。

申し訳なさ……からなのでしょうか。サレに謝らなくてはと思っている私がいますから。

「随分と変なことに巻き込まれているね。」

「…………え？」

ちよつと伝えづらいですね……なんて考えていると、聞き覚えのある声が辺りに響き渡る。

驚いて声の方へと目を向けてみれば、そこには良く知る存在が立つており、私のことを見つめていた。

「ラ……ラザリス……!」

ラザリス……一時期ルミナシアと生存競争を行つていたもう一つの世界、ジルディアの可能性の化身である世界の水子。

今は共存の道を歩むため、ルミナシアの世界樹の中でもう一度眠つてもらつていたその子が、呆れたような表情をして私の元に寄つてきた。

「どうしてここに……？」

「どうして？君がいなくなる気配を感じたから追つてきたんだよ。共に生きる道を一緒に探そとか言つていたくせに。ボクを置いて消えていくとか何を考えているのかな？」

「そ……それは……」

「まあ……今回はなんらかの不可抗力みたいだし、あまり言うつもりはないけど、それはそれとしてボクの前から無断で消えるのはやめてもらえない？」

「……ごめんなさい。」

「……まあ、いいよ。今回は許してあげる。」

トコトコと歩み寄ってきたラザリスは、私にピタリと寄り添うようにくつづいてくる。

クラースさんたちはそんなラザリスに無言で目を向けた。

「……ラザリス。私たちがいなくなる前、あなたは何か見ましたか？」
「ボク？ そうだね……君らが乗っているこの船が、大きな雲に隠れそうになつていたことくらいかな。ただ、その雲はただの雲とはまつたくちがう感じがあったよ。その雲に触れた瞬間、この船が半透明になるのを一瞬だけ見たからね。」

「……つまり、その雲が今回の？」

「おそらくね。ただ、あの雲が何かまではボクにもわからなかつたかな。」

ラザリスから教えてもらつた少しの情報。でも、原因が一つわかれば調べるための道標ができる。

「ありがとうございます、ラザリス。あなたがそれを教えてくれたおかげで、どうするべきかの道が一つできました。」

「別に。ボクはさつさとジルディアに戻りたいだけさ。君たちのためなんかじやない。ほら、さつさと情報をみんなに伝えてきたら？」

「そうですね。ラザリスも一緒に行きますか？」

「…………まあ、別にいいけど？」

とりあえずの方針を決めた私は、急いでアンジュちゃんの元へと向かう。

サレにも説明しないといけませんし、みんなにもどうするべきかを伝えなくてはいけませんから。

私が歩み始めれば、ラザリスも私にピッタリとくつついたままついてくる。

……なんで私にくつつくのかは少しだけわかりませんが、特に悪さをするつもりはないみたいだし、このままでいい気もします。

「…………ライラとラザリス……行っちゃつたね。」

「まあ、サレなんかがライラちゃんに付き纏うよかマシだけどな。」

「……ルミナシアの世界樹が、ジルディアの世界樹を受け入れたからだろうな。おそらくだが、ラザリスにも多少その影響が出ており、ルミナシアの世界樹の化身であるライラの側にいる方が安定するのだろう。」

「ラザリスが悪さをしないのであれば、このままでも問題はなさそうね。」

私たちが立ち去ったあと、クラトスさんたちがそんなことを話しているなんて知らずにホールにいるアンジュちゃんの元へと向かう。アンジュちゃんに話せば、放送室を使わしてくれませんかね……？

サレとラザリスの邂逅

「つまり？僕は知らず知らずのうちに君らのもとに舞い込んできた面倒ごとに巻き込まれて？しばらくの間、君達アドリビトムと行動を取らなければいけないってことかな？」

「ええ。こんなことになるとは思いませんでした……。」

「それ僕のセリフなんだけど？僕が仕えている帝国に戻るどころか、僕が仕えていた帝国すらない場所に飛ばされるとか……」「不満？と言うものはあると思いますが、私たちも混乱してるわけで……。」

「それはわかつてゐるんだけどねえ……」

あれから、バンエルティア号の船内へと戻った私は、アンジュを通して乗組員全員に今回のこと伝えてもうつた。

そのあと、いつも自室以外で過ごすことが多い展望室へと足を運べば、そこには腕を組んだ状態で、視線だけで説明してもらおうか？と訴えて来るサレの姿があつた。

とりあえず、現状を彼に伝えれば、彼は深く溜息を吐いたあと、やれやれと小さく呟いた。

「……ところで、君に引っ付いてるその子どもは誰だい？アドリビトムのメンバー……には見えないけど。」

「実際アドリビトムメンバーではありませんよ。そうですね……言い表すとしたら、家族……に近いのでしょうか……。」

「違うと思うけど、ボクとデイセンダーにはそれなりに深い繋がりを持ち合わせているよ。正確には、ボクの世界であるジルティアとディセンダーの世界であるルミナシア……この二つの世界にね。ボクは別の世界の化身……ルミナシアに取り込まれた別の世界の存在だから。」

「…………この子、頭がおかしいのかな？」

「なんだと……？」

「急におかしなことを言い出した君に対する正当な評価さ。別の世界？その化身？ここまでわかりやすい作り話を、誰が信じると言うのか

な？」

「…………。」

ラザリスから殺気が溢れ出る。自分の世界を否定されたから怒つてしまつたのかもしれない。

「ディセンダー。一応こいつはキミの世界の住人だから聞くけど、消してしまつて構わないよね？あの青い髪の神官……アンジュだつける？彼女から話は聞いてるよ。こいつつてディセンダーの敵対者だつたんだろう？今でもそうなんだろう？ならここに置いておく必要はないんじゃないかな？消しても問題ないよね？外は一面中空だつたから、ズタボロになつても外に捨てちゃえば問題ないんじゃない？」

「へえ？君が僕を消すつて？やめておいた方がいいよ、おチビちゃん。逆に返り討ちにあつて君が壊れてしまうだけだからね。言つておくけど、僕は子ども相手であろうと敵対するなら容赦しない質だから、間違いなく死んじやうけど、いいのかな？」

辺りの空気がかなり重くなる。敵意と敵意。殺氣と殺氣のぶつかり合いが起つていてるのか、とにかく居づらい。

人は辺りの状況によつて、その場にいるだけでも苦しいと感じてしまうことがあるとアンジュたちから教えてもらつたけど、こう言うことを言うのでしようか。

どうしたらしいのでしょうか……私に出来ることつてありますかね？

……ラザリスの世界……ジルディアが存在することはサレに話してもいいのでしようか……？

あ、ルミナシアの世界樹とジルディアの世界樹が混ざり合つた世界樹があつちにはありますし、もしかしたらまだわかってくれるかもしれませんね。

「えつと……サレ。」

「なんだい？今、このおチビちゃんをどう鬻つてやろうか考えてるんだけど？」

「言葉が物騒です。いや、今はそうではなくてですね。ジルディアは確かに存在していますよ。私も、自分の目ではつきりと見ましたか

ら。

それに、今のお母様……ルミナシアの世界樹がその証拠になつています。」

「…………は？」

私の言葉を聞き、サレの殺氣が霧散する。それと同時に、ラザリスがそれ見たことか……と言いたげな表情を見せた。

……何とか、説明することができそうです…………。

.*...。○○☆*。..。.*...。○○☆*。..。.*...。

○○☆*。..

「……大体話はわかつたけど、やっぱり信じられないなあ。確かに、ルミナシアの世界樹は、いつの間にか二種類の木が合わさつたような見えた目になつていたけど、その原因が、別の世界を取り込んだからだつて？まあ、あれが夢だとは思えないし、間違いではないのだろうけど……。」

何とかラザリスを落ち着かせ、サレにもジルディアは存在しているのだと教えれば、一旦の喧嘩は落ち着いた。

でも、やっぱりサレはジルディアそのものを見たことがないから、信じることができないようだ。

こんな時、私もカノンノのように絵が描けたら、ジルディアがどんな世界で、どれだけ綺麗な世界だつたのかを教えることができたのだろうけど、残念ながら私は、絵を描くのは少し苦手のため、それをすることができない。

カノンノに頼んだら描いてくれたりしませんかね……？ああ、でも、カノンノに迷惑はかけたくありませんし……。

「とりあえず、とても綺麗な世界だつたとだけ言つておきます。本当に……すごく綺麗な世界でした。」

――――同時に、少しだけ寂しいような気もしましたが。

一瞬だけ脳裏に過つた言葉は、そんな言葉だつた。ラザリスの世界、ジルディアは、ジルディアならではの生態系？とか言うものが存

在していた。

そこに生きる住人たちとは、言葉を交わすための機能がなくて、その世界には静寂と穏やかさが広がっていた。

でも、お母様が作った世界……ルミナシアの賑やかさや明るさを知ってるからか、それとも、私がお母様の子どもだからなのか……よくわからないけど、あの世界は静寂と穏やかさが広がると同時に、ただひたすらに寂しくて……。

「……そう。まあ、生まれて一年も経つてない君が嘘をつけるとは思えないし、そんな世界があるんだと認識しておいてあげるよ。信じるか信じないかは別にしてね。」

「…………。」

ボクの世界はちゃんとあるんだと言いたげなラザリスを落ち着かせるように、頭を優しく撫でてみれば、彼女は不満そうな表情はすれど、サレに殺気を向けることはしなかった。

「大丈夫ですよ、ラザリス。私は……私たちは……ジルディアがあると言うことを知っていますから。」

サレは見てないからこんな風に言つてるだけです。自分の目でちゃんと見た私は……私たちは、あなたの世界を否定したりしました。

「君がボクの世界はないのだと否定できるわけがないだろう、ディセンダー。だって君は、ボクの世界を受け入れたのだから。いつか、ボクの世界であるジルディアと、君を生み落とした世界であるルミナシアが、共に歩めるようについて、ボクを君の世界のゆりかごへと連れて行つた。そんな君が、ボクの世界を否定できるはずがない。」

「そうですね。まあ、元から否定するつもりはありませんでしたが……。

長い時を巡り巡つて、いつか必ず、私たちの二つの世界は、もつと素敵な世界になると信じていますから。」

「…………そうだったね、ディセンダー。ボクの世界も、君の世界も、どちらも否定させたりしない。まあ、ボク自身は、まだ君の世界に対しても色々言いたいことがあって仕方ないけど、君と、君の世界樹が、どん

な風にボクの世界を織り交ぜて、これからこの世界を創造するのか見たらに、気に入らなかつたら伝えさせてもらうよ。その時は、君も、君の世界も、全てボクのものにするから、ちゃんと、ボクでも納得のいく世界を作つてよね。」

「…………まあ、その時は覚悟はしておきますね。ただ……キバでぐつさりはやらないでください。」

私の体を強く抱きしめながら言葉を紡ぐラザリスに、苦笑いをこぼしながらも、ラザリスにとって納得いかない世界になつてしまつた時は、彼女の言い分を真正面から受け止めることを約束する。

エラン・ヴィタールができる直前……私のお母様であるルミナシアの世界樹の核がある場所を乗つ取ろうとした際にやられた、三本の牙に貫かれる痛みを思い出してしまつたため、それだけはしないでくださいねとお願ひも織り交せて。

あれ、本当に痛かつたんですよ。あれだけはもうやられたくありません……絶対に。

「…………僕を置いてけぼりにして話を進めるのはやめてくれないかな？蚊帳の外のせいでの内容が頭に入つてこないのだけど？」

未だに抱きついて来るラザリスの頭を撫で続けていると、サレから訴えるような声が聞こえてきた。

視線を向けてみれば、今度は彼の不満そうな顔が映り込む。再び苦笑いをこぼした私は、ごめんなさいと一言彼に謝罪をしておくのだった。